

研究滞在記

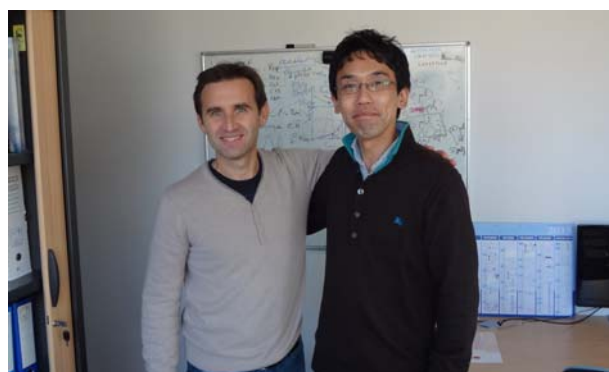
高分子制御合成領域 中村泰之

2015年10月末より約一か月間、フランス・リヨンのリヨン第一大学（UCBL1）・フランス国立科学研究センター（CNRS）のCPE-Lyonにて、化研若手研究者海外派遣制度の支援を受け、研究滞在した。研究目的は、エチレンのラジカル制御重合法の開発であり、この分野において近年大きな進歩を達成している、D'Agosto 博士、Vincent 博士のグループに参加して研究を行った。グループといっても日本でよく見る研究室単位ではなく、8名のボスとなる博士（CPE-Lyon は大学とは独立した研究組織であるので「教授」ではないらしい）と約35名のメンバーが、ごった煮状態のワンフロアで研究を行っている。メンバーは、フランスを中心として、ドイツ、スペイン、スウェーデン、オーストラリア、中国など各国籍にわたり、休憩時間などにそれぞれのお国柄の話をするだけでも楽しい。これほど多国のメンバーと一緒に会した機会はこれまでなかったので貴重な経験となった。

研究は、ガスであるエチレンを特別に設計された反応容器を用いてラジカル重合することであった。道具や反応の取り扱いが普段行っている重合反応とは違いがあるものの、スムーズに実験を開始することができ、最終的には目的である制御重合の基礎部分を達成することができた。実験環境において日本での研究との大きなギャップは、実験を行える時間であり「18時半にはすべて終わること」というかなり厳密なルールだった。このため、時間単位の毎日の実験計画が必要になり、機器の測定依頼や、グループでの昼飯、日中散發するコーヒープレイクなどを加味するため、はじめは窮屈感があったが、ペースをつかめば充実感をえられた。研究時間と個人の時間のオンオフがはっきりしていることや、時間計画の重視には見習うところが多いように思う。

さて、18時半以降の時間は何に使うか。当然個人によるが、一つは食事だと思う。リyonは美食の街ともいわれ、レストランも多い。夕飯に何人かで出かけると、なぜか帰宅時間はいつも24時くらいになった。世間話から研究の話題までおしゃべりしながらであることが理由だが、オフの時間を交流と情報交換に使うのはよい。料理は、想像できないものを積極的に注文したせいで、みな初見なのだが旨かった。研究環境の違いも楽しんで経験することができたが、文化も楽しむことができた。リyonという場所が特によかったと思う（こちらの人もみんなそう言う）。

さいごに、今回貴重な研究経験と研究推進を行うことができたのは、本派遣事業のおかげであり、たいへん感謝している。



ホストとなってくれた D'Agosto 博士と筆者



息抜き。「チーズを食べる会」